こしかやの花

南無の巻

目次

南無の二義……一
念佛三昧心の風……二四

南無の二義

南無と云ふは佛敎にて自己は罪惡苦惱の凡夫、自己の力にては解脫も成佛もできぬ者なれば之を救濟して下さる自己の信ずる神尊に對して我全生命を献げて信賴する至心を表はす言であります。今は我らが一切の神明に超て最尊たる、大慈悲の父なる阿彌陀尊に對して己が全生命を献げて救度を請求する至心を表はして南無阿彌陀佛と云ふのである。此には自己の最大の要求ありて、すべてをあなたに投込でしまつて救ひを仰ぐのである。南無とは梵語にて種々の譯があるけれども今は先づ二義を以て阿彌陀佛に命を歸して信賴する意義を述べんとす。

一、我を救ひ給へ

二、我を度し給へ

この二義である。前のは自分は苦で、空で、無常、無我なる生死の苦を生れ乍ら有て

おる凡夫にて自分の力では解脫できぬ者なれば、如來の大悲の力を仰いで常住安樂の中に救ひ下されと云ふことにて、後のは、我は罪惡深重にて弱點のみの自己にて、自分の力にては至善圓滿なる佛に成ることのできぬ者なれば願はくは如來よあなたの御力によりて我をあなたの御子としての靈德を成就さして下されと云ふ意である。また前のは自己の生命を全く如來の中に投込でしまうて、永遠の生命の光明中に生れ更らして戴くこと。後のは既に如來の救を被むり心が生れ更りて光明中の我として光と力を被むりてあなたの聖意をば此身を以て働らきに現はしてゆくことである。即ち人格向上を仰ぐ意義である。この二者の要求は哲學者のカントが謂ゆる最幸福と、最高德を要求することである。カントが此世では最幸福と最高德との兩方を完全に備へることはできぬ。最幸福と云はば健康で富豪で名譽ありすべての物質的の滿足を得る者を云ふ。此に至つて幸福な人とても必しも人格の圓滿なる道德家と云ふ譯でなく、亦最も人格の高い道德家とても必ず富豪な長壽な幸福な者と云ふ譯にゆかぬ。神の國に於てのみ最幸福と最幸德とが完全に具備することが得らるゝ。神に於てのみ得らるゝと。南無の二義なる、救我と度我とは此の二者の要求を意味す。救我は此生死の苦に沈むべき不幸な我を救ふて永劫の光明中に最幸福な我にして戴きたいと云こと、度我とは此弱點の甚しい罪惡の我をあなたの御力にて聖意にかなう人格に御育てを仰ぎますと云ふ意味である。

ミオヤなる如來の、衆生（子）に對する思召は最幸福にして而して最も高德な、福德圓滿な身にしてやり度と云ふ處にある。そこで南無と云ふ子の方より我を生死の苦を離れて最も幸福なる極樂の人として戴きたいと、また最高德なる佛に成り度いからあなたの光明を以て無限に向上させて戴きたいと云義である。而して今如來の光明の中に心の生れ更りたる時は必しも命終を俟たずとも精神的に其分に應じて此二者の要求を滿足して下さるのが如來が私共の信仰に報ひ下さることである。其意味を是から說明します。

我を救ひ給へ（我に最幸福を與へ給へ）

我を救ひ給へとは大悲の父よ、私は今罪惡深重なる者にて現在にも未來にも、身心共に苦しみ惱み、種々の憂愁恐怖煩悶のつひに止むことなきものであります。未來も地獄の炎に燒るゝ外なきものなれば絶對大たるあなたの御力によりてあなたの大慈光明中に救ふて戴き永遠の生命として活かし下され。私は全生命をあなたに獻げて投込でしまひます故にあなたは我をあなたの所有として助け下され。此罪と惱とにて永劫浮ぶ瀨なき我をあなたの聖意に投歸してしまふてからは、今迄の自分と云ものは認めませぬ。此に於て有ゆる罪も業も悉く大悲の光の中に融込でしまふて全く救はれた身となる。

救我の我に、未だ救はれざる我と救はれた上の我とは天地雲泥の差がある。生れたまゝの我は、肉の我動物的の我にて、人間てふ狡猾な罪を造る我、神心を煩悶し惱亂する我である、有ゆる動物中に最も精神の煩悶や苦惱の多いものである。而して世の文明に進めば進む程心の煩ひが重なるのである。世の凡愚の人は唯物質欲の滿足を得れば幸福は其中に在るものと思ふてをる。人生自覺のなき者の物質の滿足は還て己を苦しめる本であることを知らずしてをる、金銀財寶必ずしも人生を幸福にするものでない。凡愚物質欲に滿足を得て之を以て至つて幸福と自からきめてをる、動物性に甘んじてをる族の如きは人生の意義を語るべきものでない。苟しくも人生の意義に對して心意を注ぐに到らば、必ず人生を精神的に價値を發見せんとすべきである。

我教祖釋尊が若くして王宮に在りし時、人生問題に痛く煩悶したまひ縱令王位を履むとも老病死は免るゝこと能はず、いかに富四海を保つとも、無常と苦空とを遁るに由なし。人生の苦、生死の惱はいかにして之を解脱すべきものぞと。此が皇太子をして尊き玉位を破沓の如くに捨て、無上き榮花を價値なきものとして入山學道してつひに臘月八日の曉に、人生生死の重荷を捨て常樂永恒の光明界に入りなされた動機であつた。釋尊が人生の重き苦悶を解脱して、彌陀常樂の光明中に神を安住するに到りしは、これ宗教的に云はば、彌陀の光明に救はれたる狀態である。

何人も未だ救濟の實を得ざる間はよしや物質に滿足を得やうとも精神には眞の滿足と眞の幸福を感ずることはできぬ。

先日或求道者に問ふた、あなたは自己精神中に總てのことを暫らく放棄してしまつて全く赤裸々の我に爲て見た時に何の感じがしますと。其人の曰くそう云ふ時に何となく只不滿と不安とが感じられますと。どなたでも正直に告白したならば、これに歸するものであると思ふ。赤裸々の我に不滿と不安との感じのないと云ふは外部のことに紛れてをるからで、自から知らずしてをるのである。

赤裸々の我に不滿と不安の感じあるはこれ何人も宗教を要求する性能が具はつてをるからである。人間の思想や感情と云ふものは世の外界の事に紛れ易いものである故に、是非宗教を求めて、**ミオヤ**の救を受て始めて眞の赤裸の我に滿足と安心とが得らるゝのである。先年ある村の村長に對して宗教を求め玉へと勸告したけれども、村長氏は自分はどう考へても宗教の必要を感ずることが出來ないと答へた。漸く一年經た翌年再び會ふた時は、前とは全然替つて自分の方から切りに道を求むる心が熾に起てきた。それは最愛の女に先だたれた爲であつた。若し全く人の性情に缺處なくば最愛の乙女が死なうとも自己が死の宣告を受けようとも或は驚怖、或は悲傷する筈は無からう。然るに恁る場合に臨む時は何人も忽ちに感情に缺陷の現はれ來り、或は驚怖し或は哀悼に耐へぬ感が起り來るに相違ない。これ何人も**ミオヤ**の救ひを求むべき性情を具有する兆候である。未だ救はれぬ我には、外界の眼前に自分を眩惑するところの眼や耳また口腹の快樂などをさけて赤裸の我と爲た時は何にも我に慰安するものもなく內容を豐富に樂しましむるものもなく、只不安や寂寞の感のみであらう。而して過去を顧み將來を慮り、取越苦勞や種々の憂愁や、恐怖は常に襲ひ來りて我を惱ますであらう。恁る時に天にも地にも彼が心に入り來りて彼が總ての悶や惱を取り去りてえも云はれぬ天上界の歡喜と妙樂とを齎し來りて慰むるものはない。故に未だ救は

れざる我は實に不幸なもの慘なものである。

救はれた上の我。先の我は人間の子としての我、煩悶や苦惱を集めて我としてをつた故に、外界の僅の刺激にも直に破裂して、自ら苦しみ惱む性質を以て充滿してをつた。今度は從來の生れたまゝの我は實にあてにならぬもの、又苦しい我なるを自覺して始めて大悲のミオヤに歸命して永遠の救ひを求めた譯である。いと狹い惱の我を絶對無限の大悲の光明中に、投込でその光に融合うて全く救はれた身となる時は、今迄の罪と惱の我でなくて盡十方無碍の光明中に天地廣く日月永く常樂我淨の園には眞善微妙の花匂ひ、法悅の樂しみは是れ如來他受用の妙用にて禪悅の歡びは是ミオヤと共に受けるミ子の情となり、永遠の生命と常住の平和はミオヤの中に一切の子等と共に享受する眞の靈福と感じらるゝ。

已に救はれてからは身はまだ娑婆に在るも神は淨土に遊あそぶ。肉眼では昨日に替らぬ憂き世の中も、心眼を以て見る時はこゝも即ち安樂の都蓮華藏の世界。されども我等は生々の習慣世々の餘習氣に食はざれば怒も發せざるを得ぬ。然しいかに怒の炎の中にも心の前に大悲の面影笑を含みて在ますと想ふ時は、怒の炎も自づと消ゆる。或は悲哀に襲るゝ時も、口に我を救ひ給への南無の前には、阿彌陀大悲の親樣が無限の慈悲を以て慰安て下されば、有難さに充されて悲しみも轉じて菩提の緣となる。すべて何なる苦しみも惱みも如來の慈悲の中に融合ふからは永生の樂と化す。已に救はれし上は無限の光明中に無上の幸福を感じらるゝ。されば形は娑婆に在り乍ら、神は常樂の光明中に安住す。其光明に只自己一人のみではなく大ミオヤの中に世の總ての同胞と幸福を共にするのである。

何にせば救はるゝか

諸君は上の如くに已に救はれた上には身は此土にあり乍ら心は常樂の光明中に眞の幸福の日暮しが出來うると聞く時はどなたもその希望が發るであらう。然らば如何にせば救はれることが得られようと、問ひなさるでせう。此救を得る道に二通あります。

一、に聞信　二、修信

聞信と云ふことは、實には健全なる信仰の道ではないが、眞宗抔には連りに唱へをる故に暫く之を許して信を得るの一端とす。聞信とは即ち知識の敎を聞て能く其安心の趣旨を徹底して全く光明を獲得すること。二に修信とは一心に念佛して直に彌陀の光明に觸れて慈悲の中に融込で光明中に安住すること。初めの聞信は眞宗にては能く彌陀の慈悲を聞て、信心の眞を得る時は歡喜の一念に無爲金剛の信を得ると云ふ。また信心は凡夫の心に非ず、佛心である、其佛心が凡夫に授けられ給ふ時に信心獲得したるものである。亦信心獲得とは第十八願を心得ること、即ち南無阿彌陀佛を心得るのである。南無と歸命する一念に發願回向の心、如來より凡夫に回向し給ふのである。此時凡夫無始の惡業悉く消滅し正定聚に住し煩惱を斷せずして分に涅槃を得ると。若し此に到れば既に救はれたる相とす。救我の方面にのみ勸むるのは眞宗の傳道である。如何に口に稱名すとも全く自己を献げて如來の眞を得ざれば無効に歸すと。已に信心獲得してよりは只報恩のために稱名すべしと。救我の方に就ては淨土宗の主張よりは眞宗の方が勝れたるやに思はるゝ。

淨土家の勸むる處に依れば、若し之を劍道を學ぶに例へば、平常の念佛は劍道の稽古やまた試合にして、臨終の念佛のみ眞劍である。たとひ平生いかに習練を積むとも若し臨終の眞劍にして敗を取る時は平生數十年の念佛も悉く水泡に歸す。眞實の救を得るの事實は正に臨終の一刹那に在りと、是れ淨土家の安心であると。恁りければ今現に淨土家の傳道家と雖も、自分は平常念佛するものゝ、往生を得るや否は臨終の後でなくては未決定である。臨終の往生が即ち救濟の實であると。故に淨家の傳道家謂らく、平常はいかに念佛するも救はるゝや否やは未決定であり、夫が信心歡喜とか、また感謝念佛と云ふことは謂れなきことである。故にもし偶々念佛者にして歡喜とか感謝と云ふ語を聞く時は彼等は之を違安心として排斥する。亦甚しきは念佛は唯死後の爲にのみ唱ふべし、現に如來在ますとし直接歸命の想を以て念佛する如きは宗の

本意に非ずと。斯る譯なればある淨家の勸方にては我を救ひ給へと云ふ念佛にて救を得るは臨終に拘はるものとす。

敎祖釋尊法然の精髓を仰ぐ吾人が我を救ひ給へとの念佛は其趣を異にす。我等は必ずしも、臨終を待たずとも今日より疾く救はれて光明中の人となるべきことを勸むるものである。

我を救ひ給へとの要求はかやうである。我等は本如來より受けたる佛性を具へてをると共に衆生の煩惱の皮殼を被むつて居る。佛性は鷄の卵のやうなものにて自づと獨りで孵化るものではない。生れたまゝの我は煩惱の張本にて罪惡の源にて諸の苦惱の我である。煩惱の我のみ勢力を持て居る故に常に罪を造り苦を感じて生々世々永劫に安き事は出來ぬ。そこで今は從來の我を彌陀の**ミオヤ**の慈悲の中に投込で攝取の光明に同化せられんが爲に、南無阿彌陀佛と言の如くに心を**ミオヤ**に歸し奉りて念々相續して至心不斷なる時は、喩ば鷄卵の孵化して皮殼を開裂で雛子と爲る如くに佛の子と生れ更る。これが救はれた我である。

救ひを得るとは信心獲得と同じ心である。彌陀の慈光に融合て卵子が皮殼より出でゝ雛と爲る時は廣き天地の空氣を吸ひ明き光の中に出たる如く、已に信心開く時は得も云はれぬ靈感や有難さを感じらるゝ。釋尊が六根常に清らかに光顏永しへに麗はしく在せしは、彌陀の光明中に心の生活をなされ給ふことの現はれなので、聖法然の如き、其他の彌陀の光明に觸れて靈に生ける人は、本の生れたまゝの我でなく彌陀の靈光に復活した我である。是を救はれた我と言ふ。恁やうに本の動物の我を献げて御子の靈德の我とならんが爲めに我を救ひ給へと阿彌陀尊に要求するを救我と云ふ。

眞宗の信者が已に信心得たる上は夜を晝に紹ぎて幾度となく我の救はれたるを喜びて之を思ひ出しては有難うございますナムアミダ佛と感謝しても幾度び感謝しても盡

くる事なき有難さである。已に救はれた上は、三惡道に落つるにきまつて居つたものが慈光の中に救はれたのであるから實に之を思ひ出ては感謝の稱名を禁ずることが出來ぬ。此段になると從來の淨土家の信者が現在では救はれる事は不可能である。全く死後ならでは救はれぬと言ふ流儀は、眞宗の現在より救濟を蒙むりて光明中にいと幸福な感じの中に報恩の稱名唱ふる信者の方が幸福と云はざることを得ぬ。されば彼の門徒はアゝ幸福ものよと自ら感じて報恩の稱名を洩してをる。

眞宗の念佛は救はれた上の仕合せを感じて稱名する身となりしは實に幸福である。然れども唯念佛を救我の方のみに偏して更に進んで信後に我を度し給へとの向上の大菩提心の信仰なきは大なる缺點である。信仰に依て眞の幸福を得るは可なり。然れども積極的の宗敎生活として人格の向上を求むるは信仰の眞價値なるものである。人生の眞意義は人生は最終至善の極所に向つて其光明中の向上の一路として意義ありまた價値あるのである。若し宗敎を唯生の苦死の怖を離れて永恆の常樂即ち幸福を求むるのみならばいかに信仰を得て精神的に幸福を得たからとて身體生活の苦は免がれぬ。寧ろ疾く死して淨土に生れんには如かじ。左はなくして人生には積極的の意義あることは救度なる人生向上の大道に於て信知せらる。大乘佛敎の眞意を得ざる或念佛者の現在に於ては救はるゝ事不可能であると偏する信者や又眞宗の如き彌陀の光明に人生向上の無上の力あることを解せざる缺點ある敎より、進んで吾人は**ミオヤ**の眞意を信じて如來を念ずるものである。

我を度したまへ（我を佛の子として圓滿な人即ち佛として下され）

既に救はれた我は心靈が生れ更た精神生命となる。然る後は我を度し給へとの大菩提心を發せる佛子である。佛子は上は**ミオヤ**の圓滿なるを理想として向上を旨とすべき意志でなくてはならぬ。度とは梵語の波羅密の事にて到彼岸とて現在此岸の我より人格が向上して最上至善の圓滿なる道德の究竟せる佛の位なる彼岸に進んで行くことである。度我の念佛は如來よあなたの聖意を被むりて恩寵の光に依りて私の道德心を

育て丶圓滿なる人格即ち佛にして戴き度いとの希求を南無阿彌陀佛とす。眞宗では救はる丶目的は只佛の中に無上の幸福を享受することである。それを得れば只感謝する外はない。此外に如來に對してもう要求する所はないと、きめ込んでゐる。如來を唯慈悲の深重な母親とのみ信じてをる。尙進んで如來は神聖と正義とを有してをる大慈の父である、母として子に對する願望は我子はすべての苦惱を脫して永遠の生命常樂の幸福を得させたいと言ふ所にある。父としての彌陀は我らすべての子に對して望む處唯夫のみでは滿足できぬ、父なる如來は我等を人格向上させて佛子の働き世嗣の天職(菩薩)を志し、無上の願行を成就させて圓滿なる人格、善き人となしたいと言ふ望を以て子を育み給ふ。但し世の親として我子に幸福な身、安心のできる身にしてやりたいと言ふ望は勿論なれども、更に進んで人格を高等にしてすべての人に愛敬せらるゝやうに尊き人格にいたしたいといふ望を持つてをる。

されば往生論註に曰く、若人但極樂の受樂無間なるを聞て樂を貪ぼるが爲に往生を願ふは不可である。抑々往生を願はんものは願くは佛に成りたいとの心を發すべきである。其の佛になりたいと言ふは佛に成らねば一切衆生を度す事ができぬ。衆生を度したき故に我佛に成りたい。而して一切衆生と共に普偏的に安樂を得たい。即ち一切と共に永恒の安寧を得たい。之が願往生の菩提心である。之が如來の聖意に合ふ志であると曇鸞が釋し給ふてをる。我を度し給へと私を向上させて戴き度いとの望は全く慈父の聖旨に對する子等の志願である。諸の菩薩は波羅密萬行を以て益々向上して一切の善を修して無上の佛果を期す。

願はくば我如來の御子として諸佛の如くに圓滿なる人格佛になりたいとの最上高尙なる最上遠大なる希望とは阿彌陀佛と言ふ最上極致の至善の都に在ますミオヤの御許に到達すべき心意である。然るに聖道家の菩薩六度萬行はミオヤを離れ自ら之を遂行せんと欲するが故に甚だ至難な事である。今念佛の度我の波羅密は大慈悲の恩寵の光を被りて向上するが故に至易である。

私共はミオヤの光明の道德的靈化の御育を被むる次第は例を以て言はゞ天の月と日との關係の如くである。月自身にほ元光なき物である。日光の反映即ち孜かに照る月光と爲つてをる。月が初め二三日の新月より十四日に至る迄に漸次に月の光に盈てゆく。我を度し給へとの念佛は私共の菩提心の月が彌陀の日光加はる毎に一夜々々に光を增すべく道德の向上を期することである。次第に光が加はりて十四日夜に至ることを菩薩の滿位とし、既に十五の滿月と爲りしは之を菩薩の地を超て佛位に到つたのである。

人生の最終希望

人生最終の希望は我を度し給へと言ふ念佛に依て滿足することを得。念佛は人生の生命である。無量壽と爲るはミオヤの賜である。また念佛は人生向上の大光明である。靈性の生命の源泉である。若し彌陀の光明に指導され靈化される人は必ず無上佛位に到ること必せり。人生の最終目的は那邊に在るぞとなれば二方面より人生の歸趣する眞理を信知することを得。一方は宇宙の大法に隨順して最終至善の極に到達す。一面は自己の心の奧底に潛伏せる靈性を開發して圓滿なる人格を實成す。人は宇宙の大法を離れて活きることは出來ぬ。また宇宙の根元に還ることもできぬ。故に宇宙の大法に則らなくては至善の極に到ることできぬ。また一方の自己の奧底に伏在せる本能性に具有せるものを發揮することは不可能である。寶石の資材でなきものをいかに琢磨すとも光輝を發するものでない。

阿彌陀佛は宇宙の大法より一切衆生を最終の至善なる無上佛地に攝取して圓滿なる佛と爲さしめん爲の大光明者である。若し彌陀の光明を離れて一切衆生の成佛すると言ふ理あるべからず。太陽の光を離れて此肉體の生活し能はざると同じことである。されば過去の一切諸佛もまた現在の善逝も悉く念彌陀三昧に依て正覺を成せりと經に示されてをる。

彌陀の無量無邊の光明また淸淨歡喜智慧不斷等の光明は遍ねく法界を徧照して在

ますは一切衆生の心靈を開發して圓滿なる人格即ち成佛させんが爲の大光明である。また一面吾人一切衆生には元より法身佛より受たる佛性を具有す。之を靈性とも言ふ。此佛性が即ち吾人の佛となり得らるゝ性能である。法身より受けたる吾人の佛性は必ず報身の光明に攝取せらるゝにあらざれば靈化して佛となる事が出來ぬ。吾人が人生の最終目的は**ミオヤ**より賦與せられたる靈性を發揮して圓滿なる靈格即ち佛と爲つて始めて完成したのである。

此目的を達せんには宇宙の大法なる一切衆生の心靈を攝取し靈化し給ふ彌陀の光明を仰がざるべからず。彌陀の光明には一切衆生の心靈を靈化し給ふ不可思議の靈德を具備し給ふ。其の如來の神聖と正義と恩寵との光明を以て我ら子等の心を道德的に向上さして下さる。我等が御育を被むる萬德の中に於て三四の德目を擧げて述るならば一心に念佛して彌陀の慈悲心に同化する時は他人に對して親切の心と爲り、悲しみ惱める人には同情心に富みて他人の苦みが我が苦の如くに感せられ之を安からしむるやうにする。他人の喜びをば我が喜と感じらるゝは之を布施波羅密と言ふ。初めには人間の心ばかりが働らきて佛子の心は現れて來ぬけれども此處が我を度し給への念佛なりと思ふて如來の加被を仰ぐ時は道德心が力を增すやうになる。すべてに渡つて波羅密とは向上進歩することである。正義波羅密は戒度とも言ふ。如來神聖の光明に照らされて自己を反省する時は自らの邪や惡きことは全く聖旨に契はざるが故に矯正して正直な善き心に成りたいとの向上心が增進するやうになる。人生は全く圓滿なる人格に向上すべき修行の道場と信ずる時は縱令他人より罵詈讒謗らるゝとも是**ミオヤ**より我が鑛鐵を鍛錬して菩薩の名刀と爲さんがための御方便と思へば如何なることも安忍せらる。經に菩薩に常の師はない。若し己が缺點を指摘し非難を加へ己が短所を能く見出して謗る人こそは我を矯正し給ふ恩師とせよとの御聖訓孱けなく感じらる。また經に縱令惡人の爲に骨々相挫かれ節々支解されても甘露を飲む如くに忍べよと敎へ給ふ。

初めにはなか〳〵に忍び難き事をも歩々に進むべく御育を被むる。のちには安じて忍ばるゝやうになる。

人生は**ミオヤ**より受けたる鑛鐵の心性を報身の光明を被むりて鍛錬すべき修行の爲に遣はされしものと想へば益々勇猛に進みて何なる難事にも勇氣を鼓舞して當ることを得るのである。また各自の職業は**ミオヤ**よりの使命なりと信じて業の貴賤に拘はらず念佛の光明中に勤勉努力する時はいかなる業務も波羅密なりと自覺せらるゝ。

一心不亂に念佛し如來神聖の光明に琢磨せらるゝ時は金剛石の如き玲瓏たる人格の光彩を放射するに至らん。また一心に念佛して一心の明鏡研磨する時は如來神聖正義の光が自己の意志に反映して尊とき人格の光を放たん。

若し念佛は只救我の一面にして眞の幸福を得るのみを以て目的とする時は此の娑婆即ち忍土に處して空しく生活の苦を受くるよりは疾く淨土に往きて法性の常樂を受くるに如かじ。其反面なる度我の念佛即ち人生を光明中に向上の行路として始めて此忍土の精神生活の眞意發見することを得。衆生が向上して成佛を期せんに此世界には寒熱の氣候水火風雨等の災禍あり。また人爲的にも惡人の爲めに逼惱せらるゝの難あり。恁る處に於て修行せば吾人無始以來錆つきたる佛性の名刀を磨くに荒砥を以て苔錆を去ること還て疾き如くである。されば經に此土の一日一夜の精練修行は彼の淨土に於て百歳するよりは勝れたりと。若し此土は吾人が佛性を鍛錬すべき修行の道場なりと信する時は吾人の心靈を琢磨し鍛錬するの道具能く備はれり。度我の念佛、我を今の不完全より完全に趣かしめ給へ、現在の未成品より佛子の品性を成就せしめ給へ、我が此土に遣はされし使命を果させ給へとの度我の志願を成就せんには寧ろ此忍土生活の價値あるを覺らるゝのである。

念佛三昧の神の凧

世の同胞衆よ、念佛三昧の行は三世の諸佛も悉く斯妙行に依て正覺を成じなされたほどの最とも尊き行法であります。此尊とき妙行を修する時の神の置所を能く心得て御勸めなさるやうに御勸め申します。何事でも其妙所に達せんとするには先づ神の入方が肝心であります。眞の神の投込ざる念佛では心靈に活くることが出來ませぬ。然らば何にせば念佛に神を入れる事が出來るであらうと御問なさるのでせう。今恐衲は念佛三昧の神の入方に就て話さうと思ふのであります。

南無と言ふことは自己の全心全幅を阿彌陀佛に投歸沒入してしまふことであります。然らばどう云風に投込んでしまふのであらう。阿彌陀佛の在ます所さへ何の方に在ますかは確と分りもせぬものを、その如來の中にいかにして自己の神を投込めませうと思ふでせうが、成程初めは如來は何處に在ますかは確と分らぬ如來の中に投込めやうは無いと思ふのは何人も然か思ふのでありませう。けれども如來は絶對的に尊とく在まして何の處にも在まさぎることなき靈體なれば唯無上の尊敬心を以てアナタは今現に眞正面に在ますものと信じて靈名を呼び奉れば大**ミオヤ**の大慈悲の靈胸に響きて慈悲の眸を注ぎて我を見そなはし給ふと思ひたまへ。また大悲の**ミオヤ**をお慕ひ申して一心に念じ奉るべきのであります。夫でも初めはいかに聖名を呼びて念じ奉るも其心の向ふは唯眞闇にて如來の實在すとも思はれぬ程なれども、そは自己の業障が深重なるが故に業障の爲に心神が闇いから心の向ふ所が闇いのであります。けれども只一心に念佛して慈悲の御名を稱へて至心不斷なる時は漸々に如來の慈光に育まれて心神が發達する故に神の入れ方が自つと分つて來る程に眞面目に修しなされませ。聖名を稱ふる時の心の投込み方を法然上人は道詠にてお洩しなされた。あみだ佛と心を西にうつせみのもぬけ果たる聲ぞ凉しき、と是があみだ佛と神を彌陀の光明中に投込みたるしやうにて、骸は蟬のもぬけ殼のやうに知らす〳〵無我無想と爲る。さうなれ

ば身は娑婆に在りながら神は彌陀の中に逍遙するやうになるのであります。

夫でも又思ひなさるのでせう。生れて以來まだ一度も瞻んだ事の無い如來をどうして想はれませうと。けれども確と見えねども如來は實に在ますものであるから唯佛陀の敎を信じて現に在ますことを信じて念佛し給へ。一心に念ずる眞正面に在ます如來はあなたの念ずる心を一々に受なされて在ます事があなたの心に響いて來る程に。然しながら口に阿彌陀佛と云ながら心は自己の胸中に在りて種々の雜念や樣々の妄想に驅られて神が其中に紛らされてしまふて、口ばかりは御名であるが神は如來と一つに爲てをらぬと、夫では眞の念佛三昧でありませぬ。念佛三昧の心は正に如來の光明中に風の任々凧の如くに飛び騰るべきであります。

斯樣な話がある。英國のロンドンに或會社員の中に紛擾が起た時に或名士の信仰談にて衆多の社員の紛擾が解けたとのことである。其大意は恁である。天に在ます神は肉眼では見へぬ。其眼に視へぬ神の實に在ますや否やをいかにして分るかと諸君は疑ふのでありませう。然し眼に視へぬ神なれども至誠心に祈る時は其心が確りと神樣に貫徹して神の聖意に觸る故に其が祈る人の心に確りと神の御答が感じられます。至誠心なき祈は神樣の聖旨に貫徹せぬ故に響がありませぬ。今喩を以て語らば諸君の御存知の如く此ロンドンは非常な濃厚な瓦斯氣が折々かゝるのと夫にまた煙突の煙の甚しいので少しも天が見へませぬ。夫にも拘らず季節になれば凧を揚て樂んで居るものが澤山ありませう。煙や瓦斯の氣の爲に凧は見えぬけれども今日は凧が能く揚つたと云て悅んでをるではありませんか。凧が騰つたか落ちたか見えぬのに何にして善く騰つてをることが判ると尋ねるならば答へに曰のでせう。君よ、凧は見えねども善く騰つた時は其緒に確かと答がある。若し凧が墜落して了へば緒に答がない。との譬にて至誠の祈は神に徹通して神の容ゝ處となるとの理を說て衆人の紛擾を解いたとのことであります。今念佛心も夫れと同じく至誠心の念佛は一心に神の凧が高く彌陀の中に騰るので、稱名の風の任に〳〵空高く騰る。大念は大佛に小念は小佛に一心の全部

を悉く彌陀の中に沒入して凧緒の在らん限りを盡して能く騰る時は胸の笊の中に殘るべき餘緒がない。一心不亂に彌陀に沒頭して了つた時の心の緒は夫を曳いて見ても堅く一杯に昂つてをる。諸彦よ、一心に念佛する時神の緒の有らん限りを彌陀の中に投入して了へば我胸中は妄想雜念の緒がなくなつて自分はもぬけ殼と爲て、神はみ空高く彌陀の中に騰つて居ります。其時は無我の狀態となります。念佛三昧のナムアミダ佛の風に隨つて神の凧が力一杯に騰つた心の狀態を聖善導は「神を騰て踊躍して西方に入る」と讃してあります如くに、三昧中に歡喜踊躍して神は淨土に逍遙する相となるのであります。

全く能く念佛三昧を修した方ならば其時の神の在る處が能く判ります。業障の瓦斯や煩惱障の煙にて自己の神が彌陀の中に合致した事は視えねども深く三昧に入て神が彌陀に合したる時は胸に何とも言はれぬ靈感の答がある。若し神の凧の彌陀の中に騰らずして地に落ちたならば折角の念佛中に只婆婆の雜念の爲に紛はされて貴重な時間と精力とを空しく費やしてしまふのは實に遺憾な次第ではありませぬか。神の凧が能く騰らず胸の笊の中に緒の殘りある故に種々の心緒が現はれて樣々の妄念雜念と爲るのであります。心の在らん限り一杯に騰て心の緒が殘りあらずば妄想雜念は自ずから薄らいで來る。而して神の眼も漸々に開けて廣い〳〵大光明中即ち如來の中に在るやうになります。

諸君よ、念佛する時は神を一直線に高く〳〵み天さやかなる彌陀の中に投込んでしまふことを能く修習し玉へ。稱名の風に神の凧は歡喜踊躍しながら飛び騰りて彌陀の中に入神してしまふ時は心の笊の中に心緒を殘さず妄念の跡を拂つて三昧に入る時は身はこゝに在りながら神は淨土の人となるのであります。

いや高く心の凧はあがるなり御名よぶ聲の風のまに〳〵
月を見て月に心のすむときは月こそおのが姿なるらん

昭和三年十一月廿八日印刷
同　三十日發行
誌代年七冊壹圓貳拾錢（郵稅共）
年拾貳冊　貳圓（郵稅共）
編輯兼發行人　山崎辨成
東京市小石川區諏訪町五五
印刷人　小林七太郎
電話小石川一四九五
市京市小石川區水道端二ノ四四
發行所　ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番